アラスカの大自然の中で過ごした１年間

理学部教授　**林　　政　彦**

アラスカの大学・研究

2007年８月28日から１年間、アメリカ合衆国アラスカ州フェアバンクスに、妻、２人の子供とともに在外研究員として滞在した。

アラスカは、アメリカ合衆国第49番目の州であるが、アメリカ本土ではない。通信販売などでも料金体系では別枠となる。同時に、アメリカの最北端でもあり、ハワイと並ぶ西の端に位置するアラスカは、ヨーロッパ、アジアに最も近い戦略拠点のひとつである。一方、開拓精神を誇りとするアメリカ人にとっては、アラスカは、Last　Frontier と呼ばれる憧憬の地でもある。

１年間お世話になったのは、アラスカ大学フェアバンクス校（UAF）の地球物理研究所（GI）である。アラスカ大学は州都ジュノー、かつての北周り航路の中継拠点アンカレッジ、そして、私の滞在した内陸の中継拠点フェアバンクスにある３つの分校からなる。フェアバンクスは、人口４万人程度の小さな町である。周辺の村などを含めた自治区全体で10万人弱。そんな小さな町の学生数１万人の総合大学がUAF である。

地球物理学研究所（GI）は、世界的な北極研究のメッカのひとつであり、UAF の核となる研究所である。アメリカにとっては、北極域の研究を自らの領土でできる唯一の貴重な場所がアラスカであり、UAF は磁気圏等の極域の研究拠点として位置づけられている。NASA 等からの研究資金を確保してくる地球物理関係の先生方は、わずかの講義をして好きな研究に熱中できるが、文系の先生方は講義主体の勤務となる。文系の先生方にとってはUAF はあまりいい勤務地ではないようだ。刑事裁判を専門とする韓国人の先生と子供づき合いをさせていただき、いろいろお世話にもなった。彼からは「なぜ、フェアバンクス校で地球物理の先生方が優遇されるのかわかるか？」ときかれた。そして、彼も家族を連れてテキサスへと転勤していった。

私自身は、南極越冬隊に２度参加するなど、全地球的な大気の研究を行っている。UAF が在外研究の場としての選択肢のひとつとなったのは、ごく自然のことだった。南極と北極はともに極域でありながら、大きな違いを持っている。南極大陸と北極海という地理的な違い、植生や動物相の豊富さ、人間の活発な経済活動地域からの遠近など、まさに対照的な場所なのである。滞在中、生活、遊びを通してもそれを実感した。全球的な目で見ると、極域大気は地球大気の終着駅のようなものである。日本やアジアからもいろいろなものが大気に運ばれてアラスカを経て北極に流れ込む。日本の春の風物詩、黄砂もそのひとつである。今回の滞在中、せっかくの機会なので、アジアからはるばる運ばれてきた黄砂を気球を使って観測する機会を狙った。残念ながら、滞在中はアラスカまで黄砂はあまり飛来せず、観測の実施には至らなかった。しかし、その経験は、帰国後の観測計画の展開の要のひとつとなっている。

アラスカの自然と生活

アメリカの一部としてのアラスカの基盤が固まってきたのは、ゴールドラッシュのときである。フェアバンクスもゴールドラッシュ時の内陸の中継拠点として発達した。しかし、鉱物資源が途絶えた町は必然的に衰え、ゴーストタウン化する。あるいは、狩猟、観光などを生業として生活を続ける人々が残ることになる。フェアバンクスもそんな町のひとつである。ローカル新聞の名前は、Daily News Miner。日本語にすれば「鉱夫日報」であろうか。日本であれば明日にでも廃刊になりそうな名前である。

そんなフェアバンクスやアラスカの現在の主要産業は観光業である。日本人にとっては、アラスカとくにフェアバンクスはオーロラの代名詞のようなものである。そして、フェアバンクスにとって、日本人は冬の観光収入をもたらす貴重な客であり、「冬にわざわざアラスカに大挙して来る酔狂な人種」でもある。韓国人も中国人も冬にはそれほどやって来ない。滞在中に何度となく、「なぜ、日本人はオーロラがそんなに好きなんだ？」と質問された。自然の神秘の代表だから、と答えたいが、あまり理解してもらえそうもなかった。

さて、アメリカ人は夏にアラスカに来る。キャンピングカーで１ヶ月以上の滞在をするのは当たり前。なぜ夏に？それを、滞在の最後の３ヶ月間に理解することになった。

私自身は、５月10日から８月20日までの100日に及ぶ子供の夏休みをどうするか、大きな不安を抱えていた。サッカーチームに所属させ、サマーキャンプに参加させ、ウィークエンドには欠かさず、ドライブ、キャンプに出かけた。アラスカのキャンプは実にいい。予約不要、安上がり。自然の中で子供たちと釣り、カヌー、カヤックを楽しみ、キャンプをして、焚き火を囲む。緯度が高いため、午後11時過ぎまで明るいのでゆっくりできる。あっという間に３ヶ月がすぎ、家族４人後ろ髪惹かれる思いで帰国準備にいそしむこととなった。

滞在中には、北極域ならではの自然を子供とともに満喫した。オーロラはもちろんだが、それだけではアラスカはもったいない。クロスカントリースキー。氷点下40度。沈まぬ月。沈まぬ太陽。グリズリーベア、ムース、トナカイの群れ、地リスなどの野生動物との遭遇。渡りの鶴の鳴き声で目覚めた朝。極寒のなか川面から立ち上る湯気。湖面に映る美しい山。森と水の佇まい。氷河の散策。雄大なアラスカ山脈。蜃気楼。夜中に青白く光る高度80㎞付近に出現する雲。サーモンフィッシング。贅沢な自然を独り占めしているような感覚にしばしば陥った。

そんなアラスカの人間と自然との接し方の象徴のひとつが「熊」との関係の持ち方だった。フェアバンクス滞在中の一年間に住宅地域に何頭かのグリズリーベアが現れ、そのうち10頭近くが射殺された。広大な自然の中に人々は住んでいる。熊が人の食べ物の味を覚えると、あるいは、人から何か確保できるということを覚えてしまうと、人里に頻繁に現れるようになり、摩擦・事故が生じてしまう。人間としては彼らを排除せざるを得なくなる。そうならないために、熊が人間の食べ物やごみに接することができないよう最大限の注意を払う。「Keep Alaskan Bear Wild」という態度である。

手つかずの豊かな自然のなかでゆったりと過ごす。それがアラスカでした。自然科学者冥利に尽きる１年でした。

最後になりましたが、在外研究の機会を与えてくださいました、福岡大学および理学部教授会に心よりお礼申し上げます。なお、アラスカの自然や滞在中の生活を紹介した「アラスカ日記」を http://www.se.fukuoka-u.ac.jp/hayashi/に掲載しています。息抜きにでも、ご覧いただけましたら幸いです。